様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２２３７

研究課題名（和文）平成時代の四国遍路における不断の巡礼者と宗教的権威

研究課題名（英文）Perpetual Pilgrims and Religious Authority with the Contemporary Shikoku Henro

研究代表者
ＳＨＵＬＴＺ　Ｊｏｈｎ・Ａ（SHULTZ, John）

関西外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：９０７２２７２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：このプロジェクトは、四国遍路の終わりなき巡礼という、非常に重要でありながら軽視されてきたテーマを追究するものである。本調査の目的は、継続的な巡礼者についての豊富なデータを収集し、これらの事例研究の意味を批判的に分析し、社会システムにおける宗教的権威は、遍路の完巡回数に比例するという単純な仮説の検証であった。このエスノグラフィーは、5回にわたる四国への集中的なフィールドワークによって行われた。この研究により、オックスフォード大学出版局から書籍が出版されたほか、査読付きのジャーナル記事が5本、編集された書籍に3章が掲載された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、現代の四国遍路のデータを用いて、世界的な巡礼研究の分野に新たなパラダイムを確立することを目的とするものである。我々は、聖なる旅の基本的な構築された意味が、それに費やされた時間という重要な変数の関数であることを示す。その際、この分野におけるいくつかの重要な理論や分析的方向性に疑問を投げかける。また、巡礼研究以外の分野でも、現代の宗教性全般について重要な示唆を与えている。

研究成果の概要（英文）：This project pursues the deeply significant, but highly neglected, topic of unending or continuing pilgrimage on the Shikoku henro. We intended to test the simple hypothesis that religious authority in the social system is proportional to the number of henro circuits completed. This ethnographic work included intensive fieldwork done over five trips to Shikoku. Dozens of interviews were conducted with pilgrims, priests, and other consequential actors related to the pilgrimage. In addition to interviews, a detailed survey was conducted, and numerous other sources of data were employed, including literature and internet postings We cultivated a rich, unparalleled data set and established the basis for new theoretical orientations for the study of pilgrimage. This study produced a book published by Oxford University Press, five peer-reviewed journal articles, and three chapters in edited volumes.

研究分野：宗教学

キーワード：pilgrimage　Shikoku Henro　perpetual pilgrims　time variability　religious authority　asceticism

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様 式 C-19、F-19-1、Z-19(共通)

1.研究開始当初の背景

この研究は、主要なテーマである「一度遍路を経験した人は、その後も遍路を続ける傾向が顕著である」ことの重要性を指摘した一連の先行研究から生まれたものである。1980 年代後半から、イアン・リーダー（この研究の協力者）は、日本の巡礼全般、特に四国遍路に関する一連の研究を行ってきた。*2004 年に出版された『Making Pilgrimages: Meaning and Practice in Shikoku』は*、英語版では遍路研究における最高峰の文献となった。本書では、「永代巡礼者」と呼ばれる、何度も旅に出る人々について分析的に記述している。このような人々の宗教的生活が遍路と結びついていることを指摘している。

遍路に関する私自身の研究は、四国に遍路が絶えることなく存在したことを証明するための、サンプル外検証として機能した。私の博士論文とその後の研究は、特に平成の四国遍路に関する一人称の日記や個人の記録についてであった。その中には、科研費#263700074 の助成を受けた研究も含まれている。四国遍路の記録は、初めて遍路をした人のものが多いが、著者と延々と旅を続ける人との出会いや、再訪への強い願望が記されている。四国遍路のコンテキストでは、この何度も旅をする傾向を「四国病」と呼ぶことが多いが、これは聖なる旅に対する強迫観念や依存症を意味する。私は以前、日本の他の研究者が継続的な巡礼者について言及しているにもかかわらず、この影響力のある宗教的な旅行者のクラスに特化した研究はないことを指摘した。

巡礼の継続というテーマは、近年世界的に盛り上がりを見せている学際的な巡礼研究の分野にとって、真の意味での意義を持つものと思われた。ヴィクターやエディス・ターナーなど、この分野で最も重要な理論家たちは、この現象をある種の特異な、人生で一度の活動であり、リミナリティに近いものであると位置づけている。他にも、さまざまなコンテキストで継続的な巡礼の存在を指摘する学者はいたが、終わりのない聖なる旅の分析的意味を十分に理解した学者はいなかった。リーダーによって示されたように、日本は理想的なケーススタディを提供するように思われた。実際、このような宗教的実践者は、巡礼研究の分野だけでなく、より一般的な宗教研究にとっても真の意義を提供するように思われた。

2.研究の目的

本研究の目的は、四国で継続的に行われている現代の遍路に関する豊富なデータを収集し、そのデータの理論的含意を最近の学問分野の動向を考慮して検討することであった。そして、この研究が、世界的にも意義のある聖地巡礼の新たな理論的パラダイムを提示することを期待した。巡礼研究は、これまで主に西洋、特にキリスト教の例で占められてきた。そこで、このような日本の現象が、日本を超えた社会科学的な探究にどのように役立つかを示すことに焦点を当てた。

具体的には、「四国遍路の社会システムにおける宗教的権威は、遍路に費やした時間の関数である」という単純な仮説から研究を開始した。そして、遍路の権威と巡拝回数の間には直線的な関係があると仮定した。日本の歴史には、最澄から麻原彰晃に至るまで、聖地巡礼によって権威を確立した宗教家の例が数多く存在する。実際、遍路の中心人物である弘法大師空海は、中国への渡航や、伝説的には四国での放浪を通じて、その資格と影響力を確立した。四国霊場会では、巡拝回数の増加によってランクアップする先達の巡拝ガイドの制度を維持している。しかし、遍路道沿いに野宿する托鉢僧や車での一人旅で何百回と巡拝する人など、他の主体にまでその権限が及ぶかどうかは定かでなかった。

別の言い方をすれば、私たちの目的は、膨大な回数をこなした個人や人生のかなりの部分を遍路の旅に費やした個人という形で、ごく一部の異常値によって社会システムの舵取りが行われているかどうかを確認することだった。私は以前の研究で、分散化した少数派がいかに遍路に深い影響を与えるかを示した（Shultz 2014）。今回の研究では、四方遍路を中心に生涯を構成してきた人たちを含む、最も影響力のある辺境巡礼者の集合を探ることができたように思う。

研究計画書では、査読付きの雑誌記事を 2 本出版することと、巡礼者の継続をテーマとした本を完成させることという 2 つの具体的な出版目標を挙げている。これは、研究代表者である関西外語大学のジョン・シュルツと、協力者であるマンチェスター大学のイアン・リーダーの努力によって達成されるものであった。

３．研究の方法

研究者は 2 人とも宗教学の出身であり、本研究はエスノグラフィーを中心としたものであった。

本研究のフィールドワークは、主に 2018 年 2 月から 2019 年 11 月にかけての 3 回の四国への集中訪問で行われ、その都度、遍路道のほとんどを回り、お寺で、あるいは遍路道そのものを見かけるたびに立ち寄って話しかけ、インタビューした。遍路を複数回している人に出会ったら、プロジェクトの内容を説明し、インタビューをお願いし、何度かは、巡礼者が巡礼路を離れているときにも、彼らに適した様々な場所で、可能な限り正式なインタビューを行った。また、巡礼記や『へんろ』誌のバックナンバーを読むなど、出版されている資料も多く利用し、国先達の登録者に毎月送付されている『へんろ』のバックナンバーも調査した。加えて、『へんろ』にプロジェクトの概要を記した短い記事を掲載し、インタビューに応じる意思のある人に連絡を取るよう依頼した。その結果、多くの反響があり、お互いに都合の良い場所でインタビューをすることができた。また、インターネットを利用した情報収集やコンタクトも行い、巡礼者のブログやネット上の文章を読んで取材に至った例もある。さらに、ジョン・シュルツが 2 度にわたって四国を訪れ、多くの巡礼経験を持つ巡礼同好会のリーダーや会員と幅広く交流した。その中には、高野山で一巡したお遍路の締めくくりとしての、同会のメンバーとの旅も含まれている。また、遍路に関係し、継続的に遍路をしている僧侶の方々にもお話を伺った。

このほか、何度も巡礼している人たちに対して、長文のアンケートを送付してデータを収集した。また、巡礼者が旅の途中で残していったもので、何度も旅をしているデータや情報が含まれているものを活用した。例えば、有名な巡礼者を称えるために建てた記念石碑や碑文、巡礼者がよく持っている納め札などがそうである。納札には通常、弘法大師の像や祈願文、巡礼者の名前、住所、巡礼への祈りや願いが刻まれている。巡礼者はこれを寺院の賽銭箱に入れるのが一般的である。また、道中で出会った人に配り、特にその人が接待してくれた場合は、その人に渡す。札の色は巡礼の回数を表すもので、最高位の「錦札」（百回以上巡礼したことを表す）を目指す巡礼者にも多く出会うことができた。また、寺院の住職や関係者のご好意で、寺院に残されていた錦札のコレクションを拝見させていただくなど、さまざまなルートで錦札を拝見することができた。これらの錦札は、現役の多人数芸人のスケジュールを把握するための貴重な資料であり、また、そのような人たちに連絡を取って詳しい情報を求めたり、アンケートを送るための住所を収集するための資料でもあった。

調査期間中、日本人のリサーチ・アシスタントに大いに助けられた。アシスタントは、翻訳、通信文の作成、インタビューのサポートなど、さまざまな仕事をこなしてくれた。例えば、調査票の作成では、簡潔で分かりやすい文章を作成することができ、大変助かった。

4. 研究成果

このプロジェクトは、あらゆる面で真の成功を収めたと言える。データ面では、多くのインタビューやアンケートを実施したことで、この時代の遍路の歴史を知る窓を今後とも提供することができる。例えば、近年、遍路道のホームレス遍路は激減している。このようなデータは、遍路の歴史を通じて存在した、消えゆく巡礼者層の記録として有用であろう。また、車中泊遍路という新たな遍路層が着実に増えていることも初めて明らかにした。車中泊遍路は、車中で寝泊まりすることによって、100 回以上の遍路を達成する人も多く、その数は増加の一途をたどっている。また、700 回以上という極端な異常値を示す巡礼者のデータも独創的であり、高い記述性を持っている。さらに、引退した巡礼者という大規模な集団の扱いは、他の文献にはないものである。

理論的には、複数の巡礼の実行と反復に関連する日本のデータの分析に基づいて、世界的な巡礼研究の新しいパラダイムとなりうるものを育成できたと考える。巡礼研究という分野は、その人気の高さにもかかわらず、ちょっとした袋小路に入り込んでいることを立証することができた。この分野ではより多様な現象が扱われるようになったため、意味のある、還元的な包括的理論記述を行う能力が損なわれてきている。私たちはいくつかの出版物で、この分野の将来は、巡礼に関する解釈の多様性を生み出している重要な変数に集中することであると主張している。例えば、聖地巡礼に関する議論の中心である、体験の社会的性格や緊縮財政への訴求が、四国に関しては非常に多様であることを示す。また、お遍路の意味形成において、時間がいかに重要な変数となりうるかを示すことで、この方法論を実証している。継続的な巡礼者について考察することで、個人の怖い旅との関係が、一日から一生まで、いかに時間の関数となるかを示す。さらに、「終わらない巡礼」は四国遍路の支配的な表現であるが、この現象は世界の巡礼全般において十分に評価されていないダイナミズムであると主張する。当初の仮説を考慮すると、巡礼の回数と巡礼システムにおける全体的な権威の間には、しばしば線形的な関係があることがわかった。しかし、いくつかの重要な注意点がある。影響力と権威は、自動車で移動する巡礼者、徒歩で移動する巡礼者など、さまざまな巡礼者のタイプに区分けされていることが多い。例えば、徒歩で 7 回巡礼した人が、車で 100 回巡礼した人の中に指導者を見出すことはまずない（その逆も同様である）。最後に、今回の分析は、四国遍路は一握りの突出した個人の影響力によって進化・変化してきたという、これまでの研究者の主張をさらに裏付けるものである。実際、この研究は、この聖なる旅に関して最も権威のある人物を紹介している。

出版物に関しては、研究計画書に記載された目標を大幅に上回る成果を上げることができた。その結果、1 冊の本、4 本の査読付きジャーナル記事、4 つの編集本の章を執筆することができた。オックスフォード大学出版局との共著『*Pilgrims Until We Die: Unending Pilgrimage in Shikoku*』（2021 年）である。この 248 ページの本は、日本に関する背景知識を持たないような世界の巡礼研究の研究者に、我々の研究成果を紹介するために特別に書かれたものである。この本には、この分野のトップクラスの学者たちから温かい推薦の言葉が寄せられている。本書は、上述のように、歴史的、伝説的、そして制度的に、終わりのない巡礼という概念を中心に展開する四国遍路の肖像を描くために、素晴らしいデータを結集している。実際、他の著名な分析枠組みでは、この神聖な旅を理解することができないことを示した。さらに、私たちはこのテキストを普及させ、その意義を人々に喚起するために真摯な努力を重ねてきた。出版以来、私たちはこのテキストについて 2 つのプレゼンテーションを行った。1 回目は New Books Network のポッドキャストで、Apple Podcasts や Audible などで視聴可能である。もう一つは、九州大学主催のオンライン会議（Zoom）で、世界各国から約 70 名の研究者を集めて行うことができた。

書籍のほかにも、この仕事によって 8 つの出版物が育まれた。5 つの査読付きジャーナル論文は、ジョン・シュルツが 3 つ、イアン・リーダーが 2 つ執筆したものである。最初のタイトルは「*Gaijin Henro*: Outliers, Discrimination, and Time-Variability with Pilgrimage in Shikoku」（2018）は、一人称の文学を通して四国の外国人巡礼者の問題を具体的に見ながら、理論的考察の重要なポイントを紹介している。外国人旅行者にとっても、遍路を続けなければならないという強制力が強いことを示す。第二に、「Pilgrimaging Through Time: Theoretical Implications of Continuing Journeys on the Shikoku Henro」と題する論文（2020 年）は、学会論文の延長として、巡礼研究の重要課題を整理し、学問の新しい理論的方向性を示唆するものであった。同論文はオープンアクセスで、世界中から 243 件のダウンロードがあった。「Vertical Pilgrimage: Japanese Mountain Religious Experience and American Big Wall Climbing」(2020)では、私たちの四国由来の理論がどのようにサンプルとして機能するかを示している。イアン・リーダーは、「Constructing Identities Through the Shikoku Pilgrimage」 (2022; in press)で、我々の分析を日本の宗教研究者に直接伝えている。最後に、リーダーは近日中に論文「An Unwelcome Minority: Banning Buddhist Practices, Marginalizing Itinerants, and Constructing Heritage in a Japanese Pilgrimage」 (2022; in press) を出版する。

イアン・リーダーは、より広い読者に向けて、また日本学に焦点を当てた編集本の 3 つの章を執筆している：「Omissions, Stratagems, and Dissent: the Shikoku Pilgrimage and the Problems of Applying for World Heritage Status」（2020）、「From Marginalization to National Popularity and Decline: Fluctuating Patterns in the Shikoku Pilgrimage, Strategies for Revival and Fears for the Future」（2022 年、出版中）、「Twists, Turns and Changing Directions: Reflections on Long-term Studies on a Japanese Pilgrimage Path」(in press).

最後に、コロナ禍で追加された時間で、継続的な巡礼の分析を拡張して、日本の四国のお遍路さんと関西の他の場所での山岳宗教の実践に関する反復を考察することができたことを記しておかなければならない。特に、危険な登山修行が繰り返される現象に注目した。膨大な量のデータを収集したため、この研究成果からさらに 2〜3 冊の出版物が生まれると期待している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 READER, Ian	４．巻 －
２．論文標題 Twists, Turns and Changing Directions: Reflections on Long-term Studies on a Japanese Pilgrimage Path	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Approaching Pilgrimage: Methodological Issues Involved in Researching Routes, Sites and Practices	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 READER, Ian	４．巻 51
２．論文標題 An Unwelcome Minority: Banning Buddhist Practices, Marginalising Itinerants, and Constructing Heritage in a Japanese Pilgrimage	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Religion, State and Society	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 READER, Ian	４．巻 －
２．論文標題 From Marginalization to National Popularity and Decline: Fluctuating Patterns in the Shikoku Pilgrimage, Strategies for Revival and Fears for the Future	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Heritage Ecology, Holy Cities and Pilgrimages	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 READER, Ian	４．巻 48/2
２．論文標題 Constructing Identities Through the Shikoku Pilgrimage	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Japanese Journal of Religious Studies	６．最初と最後の頁 297-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 SHULTZ, John A.	4．巻 112
2．論文標題 Vertical Pilgrimage: Japanese Mountain Asceticism and American Big Wall Climbing	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Inquiry and Research	6．最初と最後の頁 91-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00007930	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 SHULTZ, John A.	4．巻 8:1
2．論文標題 Pilgrimaging Through Time: The Theoretical Implications of Continuing Journeys on the Shikoku Henro	5．発行年 2020年
3．雑誌名 International Journal of Religious Tourism and Pilgrimage	6．最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21427/D7VC7D	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 READER, Ian	4．巻 －
2．論文標題 Omissions, Stratagems, and Dissent: the Shikoku Pilgrimage and the Problems of Applying for World Heritage Status	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Sacred Heritage in Japan	6．最初と最後の頁 182-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 SHULTZ, John A.	4．巻 107
2．論文標題 The Gaijin Henro: Outliers, Discrimination, and Time Variability with Pilgrimage in Shikoku	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Inquiry and Research	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18956/00007783	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　6件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 READER, Ian and John A. SHULTZ
2．発表標題 Book Launch Presentation: "Pilgrims Until We Die"
3．学会等名 Japanese Religious Studies: Behind the Scenes. Kyushu University (online)（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 READER, Ian and John A. SHULTZ
2．発表標題 Podcast: Exploring "Pilgrims Until We Die"
3．学会等名 New Books Network（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 SHULTZ, John A.
2．発表標題 Juicy Data: Ethical Conundrums in Social Scientific Fieldwork
3．学会等名 Japanese Religious Studies: Behind the Scenes. Kyushu University (online)（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 SHULTZ, John A.
2．発表標題 The Steepness of the Pilgrim Path: Ascetic Lessons from Japan
3．学会等名 Pilgrimage and Pedagogy. Boston College (online)（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 SHULTZ, John A.
２．発表標題 Vertical Pilgrimage: Crystal Asceticism on the Big Walls of El Capitan
３．学会等名 Sacred Journeys 8（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 SHULTZ, John A.
２．発表標題 Perpetual Pilgrimage: The Implications of Journeys Without End on the Shikoku Henro
３．学会等名 Sacred Journeys 7（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 READER, Ian
２．発表標題 At home on the road: permanency, obsession and perpetual pilgrimage in Shikoku
３．学会等名 Approaching Pilgrimage: Methodological Issues Involved in Researching Routes, Sites and Practices（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 READER, Ian
２．発表標題 Perpetual Pilgrims in Shikoku historically and in the present day: Examining their implications for the study of pilgrimage
３．学会等名 Researching Contemporary Japanese Religions. University of Manchester.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 SHULTZ, John A.
２．発表標題 Perpetual Pilgrimage of the Shikoku Henro: Examples and Implications of Spiritual Lives on an Unending Road
３．学会等名 Anthropological Institute, Nanzan University（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 SHULTZ, John A.
２．発表標題 Pilgrim Footpaths and Theoretical Landscapes: Propositions from the Shikoku Henro
３．学会等名 Kyoto Asian Studies Group（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Ian READER and John SHULTZ	４．発行年 2021年
２．出版社 Oxford University Press	５．総ページ数 248
３．書名 Pilgrims Until We Die: Unending Pilgrimage in Shikoku	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	イアン・リーダー (READER, Ian)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関